

「ホルモン産生腫瘍」

編集

石川 七 郎 国立がんセンター総長

笹 野 伸 昭 東北大学教授

井 村 裕 夫 京都大学教授

九州大学教授

井 林 博

国立がんセンター総長石川七郎博士、東北大学病理学笹野伸昭教授、京大内科井村裕夫教授らの編集で、わが国の代表的な研究者48氏により機能性腫瘍に关する研究の全貌と今後の動向が見事に集大成されたmonograph「ホルモン産生腫瘍」がこのたび刊行された。石川博士は周知のごとく Liddle (1961) が異所性 ACTH 産生腫瘍の new clinical entity を発表する以前に、多数の肺癌自験症例の観察から臨床的に異質で特異な臨床症状として色素沈着、多毛傾向、パチ状指や血漿 17-OHCS の高値などの存在をすでに 1950 年

代に指摘された。引続き厚生省がん特別研究班を構成すると共に Functioning tumor 研究会を創設され、わが国におけるこの方面の研究を情熱的に推進育成された先達である。笹野教授は文部省がん特別研究班「異所性ホルモン産生腫瘍の基礎的研究」の班長として、また井村教授は異所性ホルモン産生腫瘍の臨床的研究分野でともにわが国における文字通りの frontier として高名である。本書は編者らが序文その他で指摘されておるように欧米にもなお類書をみない世界的にも unique な著書であり、本書発刊の意義はきわめ

て大きい。

本書はホルモン産生腫瘍の生化学と病理、APUD 細胞系腫瘍、腫瘍ホルモンの免疫組織化学的同定とホルモン産生腫瘍の培養と移植などについて詳細な総論に始まり、以下産生ホルモンを中心に (1) ステロイドホルモン産生腫瘍、(2) アミン産生腫瘍、(3) 甲状腺ホルモン産生腫瘍、(4) 副甲状腺ホルモン産生腫瘍、(5) 下垂体ホルモン産生腫瘍、(6) 膵島ホルモン、消化管ホルモン産生腫瘍、(7) 胎盤ホルモン、胎児蛋白産生腫瘍などの各項目について、生化学と形態学の両面から貴重な自験成績を中心にあますところなく解説が行われており、読後の充実感が揺曳と残る好著である。編者および執筆の方々に敬意を表すると共に、内分泌学、腫瘍学の研究者のみならず広く臨床家と基礎医学研究者にとって非常に貴重な好著として推薦する次第である。

B 5 頁412 図80 写真134 原色図2 1977
¥15,000 円300
<医学書院刊>